白金薮

五月号

平成２５年５月発行　第２７号

白金葭定例句会案内

六月二十一日(金) 12:00～15:00 (アビスタ第一和室)
兼題:五月雨、桜桃忌
七月十九日(金) 12:00～15:00 (アビスタ第三学習室)
兼題:甜瓜(まくわうり)、プール
八月十五日(木) 9:30～11:00 蓮見舟吟行
12:00～15:00 句会(アビスタ第二和室)

五月雨、桜桃忌の参考句 (六月二十一日分)

交る蛾の草に沈めり桜桃忌　山岸文明
地下道に水の鳴る音太宰の忌　遠藤しげる
家族など時にまぼろし桜桃忌　前田霧人
心経に無の字あまたや桜桃忌　小宮梨夫
桜桃忌せめて色付きシャツを着て　荒井玲子
桜桃忌玉川のみず潺潺と　高野力一
混浴にゆっくり入る桜桃忌　鈴木八駛郎
老いてこそ気概持ちたし桜桃忌　朝倉由美
さみだれのあまだればかり浮御堂　阿波野青畝
五月雨や上野の山も見あきたり　正岡子規
五月雨や死んでいくにも歯をなおす　貞永まこと
海のさみだれ口中の飴いつまで　松澤昭
神杉のしめ縄たるみ五月雨るる　仲居いみ子

月例句会報(13／5／17名 欠投句4名:柏餅、夏場所)

はははそはのふつと 膚(はだえ) の柏餅　飯田孝三
柏餅二つ目は偕老半分こ
触れ太鼓五月の川面響きけり
大き掌の浴衣が迎へ 客(ファン) の列
牡丹の一花の風のしづもれる　増田陽一
藤の花褪せて熊蜂うろうろす
葉のなかに餅見失ふ柏餅
道に倒れる直前の時計草
コメディアンほど暗からず雪解富士
暁の青まなうらに春眠す　増田悦子
関取の包帯白し夏きたる

柏餅葉の乾きゆく早さかな
柏餅二つめをもてあましけり
柏餅幼きときの葉の香り

光成高志

夏場所や叫(おら)ぶ応援稀勢(き・せ・)の里(さとー)
夏場所や土俵の力士肌(はだえ)照る
彦根にて山帰来餅買ひにけり
山帰来餅を作りて母を継ぐ
紫の莢にグリンピース並ぶ

光　みち

母の日に女相撲の大会を
宿直の父の鞄に柏餅
夏場所のテレビに向ひ弥次飛ばす
日曜の昼あつあつの柏餅
二人とも転がり落つる五月場所

青木啓泰

柏餅いくつ食べたと子供の日
柏餅葉っぱに香る伊勢神宮
和菓子屋に白い肌出し柏餅
子供の日柏餅には臍はなし
夜蛙に囲まれ居酒屋騒ぎ出す

吉羽多美子

麦の秋風のかたちをつくりゆく
さくらんぼ笑顔の母に供へけり
母の日に母の墓参を思ひたち
夏場所のはねて明るき夜の町へ
柏餅娘二人に男の子

松村幸一

菖蒲湯や天井高く日も高く
菖蒲湯を出て日は高く野菜買ふ
子規大人と食べ競べせむ柏餅
座布団の飛び交うて果つ五月場所
おほ母の餡の利き塩柏餅

浅野正美

みそ餡を選んで食べる柏もち
夏場所はファンと笑顔ハイタッチ
菖蒲湯は家族そろひし頃のこと
夏場所や鉛筆にぎり星取り表
抱きあげて児の手の届くこいのぼり

天神の藤のやうやく七分出来
旧家前築城石あり海の風
男根を祭りし由縁夏の海
幟たつ夏場所前の國技館
下町の柏餅には重さあり

小山陽也

柏餅待てど届かず日は落ちぬ
夏場所の太鼓のリズム足踊る
裾抱へ花嫁走る藤の下
お下げ髪きちりと結ひて初夏の風
胡坐(あぐら)して写生する子に風薫る

杉浦弥栄子

選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

5　下町の柏餅には重さあり　陽也
5　夜蛙に囲まれ居酒屋騒ぎ出す　啓泰
5　麦の秋風のかたちをつくりゆく　多美子
4　さくらんぼ笑顔の母に供へけり　多美子
4　彦根にて山帰来餅買ひにけり　高志
3　柏餅葉の乾きゆく早さかな　悦子
3　宿直の父の鞄に柏餅　みち
3　関取の包帯白し夏きたる　悦子
2　夏場所のテレビに向ひ弥次とばす　みち
2　夏場所のはねて明るき夜の町へ　多美子
1　柏餅二つ目は偕老半分こ　孝三
　二つ目は折半偕老柏餅
1　みそ餡を選んで食べる柏もち　正美
1　おほ母の餡の利き塩柏餅　幸一
1　藤の花褪せて熊蜂うろうろす　陽一
1　裾抱へ花嫁走る藤の下　弥栄子
1　大き掌の浴衣が迎へ客(ファン)の列　孝三
1　お下げ髪きっちりと結いて初夏の風　弥栄子
　お下げ髪きちりと結ひて初夏の風
1　母の日に母の墓参を思いたち　多美子

1 触れ太鼓五月の川面響きけり　孝三
1 菖蒲湯は家族そろひし頃のこと　正美
1 日曜の昼あつあつの柏餅　みち
1 夏場所のテレビに向ひ弥次とばす　〃
1 座布団の飛び交うて果つ五月場所　幸一
1 和菓子屋に白い肌出し柏餅　啓泰
1 子規大人と食べ競べせむ柏餅　幸一
1 夏場所の太鼓のリズム二足踊る　弥栄子
夏場所の太鼓のリズム足踊る
1 菖蒲湯や天井高く日も高く　幸一
1 道に倒れる直前の時計草　陽一
2 抱きあげて児の手の届くこいのぼり　正美

1 ははそはのふつと膚（はだえ）の柏餅　孝三
1 コメディアンほど暗からず雪解富士　陽一
1 紫の莢にグリンピース並ぶ　高志
柏餅幼きときの葉の香り　悦子
1 母の日に女相撲の大会を　みち
牡丹の一花の風のしづもれる　孝三
山帰来餅を作りて母を継ぐ　高志
柏餅二つめをもてあましけり　悦子
和菓子屋に白い肌出し柏餅　啓泰
柏餅待てど届かず日は落ちぬ　弥栄子

幟たつ夏場所前の國技館　陽也
柏餅葉っぱに香る伊勢神宮　啓泰
男根を祭りし由縁夏の海　陽也
葉のなかに餅見失ふ柏餅　陽一
夏場所や鉛筆にぎり星取り表　正美
夏場所や土俵の力士はだえ肌照る　高志
柏餅いくつ食べたと子供の日　啓泰
菖蒲湯を出て日は高く野菜買ふ　幸一
1 柏餅娘二人に男の子　多美子
旧家前築城石あり海の風　陽也
1 夏場所や叫ぶ応援稀勢の里　高志
暁の青まなうらに春眠す　陽一
二人とも転がり落つる五月場所　みち
あぐら胡坐して写生する子に風薫る　弥栄子
1 子供の日柏餅には臍はなし　啓泰
天神の藤今年ようよう七分出来　陽也
天神の藤のやうやく七分出来

一句鑑賞

光成高志

下町の柏餅には重さあり　陽也

下町の和菓子屋さんで買った柏餅、さていただこうと手に取ったならば、ずしりとした重さを感じた。なるほ

どあそこの店は、こういう大きい柏餅を作り続けている。あの親父さんは、やっぱり職人気質があるわいと思う。下町気質と言ってもいい。俺はこういう下町が好きだという作者のこころばへまで伝わってくる。「重さあり」の断定は物理学と文学の融合だと思うが、そこまでエキサイティングしなくていいか。本句会の最高得点でした。孝三さんの後選にも入りました。

夜蛙に囲まれ居酒屋騒ぎ出す　　**啓泰**

ぎゃあていぎゃあてい夜の蛙の鳴く声に囲まれた居酒屋だ。しばらくすると、居酒屋の中も、負けずに騒ぎ出す。作者が通り合わせて、瞬間聴覚がとらえた諧謔。これまた、その風土を愛している作者の心も伝わる。いやいや、植田の近くの居酒屋で仲間と酒を酌み交わしているのだ。論難止むことなしで口角泡を飛ばして喋りあっている。知った顔の町の衆を巻き込んで大騒ぎになっちゃった。蛙同士が目をぱちくりだ。

夏場所はファンと笑顔ハイタッチ　　**正美**

先に引退した高見盛がファンサービスに客を迎えて、手と手を合わせ叩くハイタッチをしている光景である。今夏場所の初日にあったと、報道にある。正美さんが新聞の切抜きをお持ちになり皆に見せてくれた。夏場所の兼題には皆さん往生されたようである。孝三さんの「大き掌の浴衣が迎へ客ファンの列」も同じ催しを詠まれたもの。夏場所は五月の母の日が初日、二週間の場所中は、両国の国技館前の通りに幟が立ち、浴衣の力士が闊歩して来るに出会ったりする。気候も良いので、お上りさんも入場して、升席は一杯になる。私も夏場所ばかり三回観戦したことがある。何しろ入場料が高くて、もういけないとあきらめている。

一句鑑賞（四月号26号分）

幹の瘤虚子忌の櫻ぽぽとかな　　**増田陽一**　**孝三**

虚子の忌は四月八日だから、今年のように花が早かった年なら『ぽぽ』と言うのは残り花か。併しここでは『幹の瘤』が効いていて、虚子一辺倒のホトトギスとは一線を画した複雑な思いを見るようで虚子句の句として独自である。

雨上る待ってすぐ発つ蜂の群　　**みち**

群棲の蜂だから、これは蜜蜂の巣箱である。蜜蜂は気温や天候に敏感であるし、一固体が感じたことを群全体に伝達する能力も持っているらしい。蜂は早く花に行きたくて雨の上るのを待ちきれずに居たらしい、と言う、巣箱を観察する作者の姿が見えて面白い。

春潮を足蹴の蛸の行方かな　　**幸一**

潮という形のないものを足蹴にする、とはこの屈伸自

在な軟体動物が足を束ね一直線に伸ばした全速の状態であり、一瞬の後、彼は消え失せたのである。蛸の動きをユーモラスに捉えて、いかにも春の蛸である。

この松村幸一氏から大叔父様と聞く松村蒼石の色紙を頂いた。僕が俳句を始めた頃に好きな句を写したノートに蒼石の句がある。蒼石の句は清新な観照のなかに、どこか近代的な翳りがあって『詩的』であると感じ、心惹かれたものであった。

　蟇の子のぞくぞく殖ゆる無惨かな
　びびと蛾の濡木をのぼる灯が暗し
　木の葉髪切なくも蛾の生きゐたり
　雪は無限ましらは谷の温泉に集ふ

など今も愛唱している。高志さんのご紹介で幸一氏にお会いできたことは光栄である。氏が蒼石の思い出を書かれた文章のコピーを同時に頂いたけれど、中にある御尊父の死の一節はリアルで簡潔、感傷のない強靭な文章であり、場面の悲傷が視覚的といいたいほど切なく伝わる。頂いた蒼石の色紙の句は

　春陰の海の底なり親不知

というので、これは蛇笏が激賞したという

　濡れ巌のしののめあかり蛇苺

にも匹敵する名句であると思う。

どこぞからそこは俺の地黍畑　　**孝三**

　孝三さんのお手紙から見つけたのだけれど、高志さんは久米島に行かれたのですね。それに呼応した孝三さんの御句いいですね。沖縄の砂糖黍畑、葉擦れの音に人声を聞いている。それは沖縄戦で不条理に死んだこの畑の持ち主の声に違いない。どこぞから、という措辞が地底からの声のように響く。

一句鑑賞vii（26号分）　　武者昭七

寺いらか混みあふしだれさくらかな　　**孝三**

　ひとみ上げれば古寺の大屋根、高さを競うように伸びあがったしだれざくらが風に騒ぐ。「混みあう」しだれざくらの束越しにちらりと覗くいらかの黒がしだれの虹の引き立て役だ。こぼれんばかりにびっしり咲き誇り揺らいでやまぬさくらのさまを「混みあう」としたところに作者一流の諧謔（これを俳諧という）がある。というのはこの混み具合、時節柄そのまま大企業の高みに群がる就活スーツの群れにオーバーラップしていくから、と言ったら意地悪か。「圧しあふ」ではおとなしすぎて喚起力に乏しいように思いますが如何。

琥珀なる菩薩のおはす暮の春　　**みち**

　先日、東博で「飛騨の円空」展というのを観たのを思い出した。奈良や京都の由緒正しい寺の厳かなたたずま

いの仏たちとは違ってどれも木の匂いのするなつかしい仏たちであった。木端と言ってもいいような小さい仏さんもいた。どれも目を細め口角に笑みをたたえ、年月と人々の祈りにまぶされて静かにまさに「琥珀色」に輝いていた。光背なんかどれも背負っていなかった。仏身からにじみ出るいつくしみの心さえあればいい、自分の仏にことごとしい光背など要らないことを円空は知っていたと思った。作者は暮れていく春の琥珀色の余光の中にたたずんでそんな菩薩と向き合っているのであろうか。ゆったりとしたリズムがあたりの静寂感と安らかな息遣いを伝えてくる。

詫びにけり灌仏の頭に杓当てて　　幸一

お釈迦さまの頭にかけるはずの甘茶の杓が手元狂ってコツンと頭に当ってしまったのである。「いやはやお釈迦さまごめんなさい」。ついでに隣りのひとをかえりみて「トシをとるととんだ失敗をするもんですなア。いや申し訳ない」二重のお詫び。「詫びにけり」を冒頭に据えたところに恐縮しきった作者の姿が浮び出る。軽妙なリズムも滑稽感を生んで楽しい。

桜咲く来し方思い古希の席　　正美

設けられた古希の祝の席につきながらこころは経てきた歳月を思うのである。思えばいろんな桜を見てきた気がする。得意の桜。失意の桜。喜びの桜。悲しみの桜。…。あの時も桜が咲いていたし、そのときも桜が咲きぁがってと思ったこともあったけ。長生きすりゃいろんなことがあるもんだ。芭蕉さんも言っていたっけ「いろいろのこと思ひ出す桜かな」とね。いい陽気になったねえ。古希だってねえ、元気で結構。まあ一杯いこうか。そんな遣り取り想像されます。

ハガキ句二十八報（07／8／1）

さみだれのぶつきらぼうにまつすぐに　　妙子
白鷺の弥勒映せり梅雨の水　　孝三
黄門さまの股肱昼の蚊打つ　　〃
水中を伸びて此の世の蓮の花　　高志
岩清水岩に膨れて溢れをり　　〃
洗濯物をたたむ窓辺の蚊遣香　　敏子
墓石のどすんと落つる戻り梅雨　　〃

ハガキ句管見（第二十八報）　　飯田孝三

水中を伸びて此の世の蓮の花　　高志

水中の具象をもって、水面を抜ける花の立ち姿を目に

見せる。それを抽象の次元で受けとめ、この世にあらぬ「此の世の」蓮の花がそこにある。さりげなく奥が深い。ぼくのカミさんは蓮の花を見ると引き込まれそうで怖いといつも言う。蓮は神秘の花である。読み手の鑑賞試される句だ。実作の立場から言うと、この句の造形の秘密は「～伸びて」にある。それが「此の世の」の総括を際立たせる。高度の技がもたらす不思議である。巧まず抜けている。

蓮の香や水を離るる茎一寸　　蕪村

幾つかの歳時記を見たが並べられるのは右くらいである。この句の手柄は、「～香や」。でも、掲句の方が精神性が深い。

洗濯物をたたむ窓辺の蚊遣香　　敏子

何十年も前の母親や、子が小さかった頃の妻の姿が目に浮ぶ。この頃の都会では、目にしなくなってしまった状景だが、平和な暮らしや家庭の倖はこういう日頃の身近な営みにあるのだろう。「蚊遣香」が決まる。

岩清水岩に膨れて溢れをり　　高志

岩清水が躍動して涼しい。その力感と爽涼感が見どころ。

墓石のどすんと落つる戻り梅雨　　敏子

先の中越地震の状況だろうか。ただ、奥がよく見えない。

さみだれのぶつきらぼうにまつすぐに　　妙子

腑にすとんと落ちない。「真直ぐにぶっきらぼうに男梅雨」はどうだろう。（H．19・8・9）

お便り広場（到着順、敬称略）

前略　益々の御多祥のご様子何よりと嬉しく思います。私も元気でありますが何分卒寿をとうに過ぎまして「老い」を感ずる昨今です。貴重な「大和」の写真有難うございました。この時私らの艦も共に沖縄に突入すべく同航しておりました。時まさに昭和二十年四月七日午後三時でした。今も眼裏に焼き付いております。四年間の戦争体験は終世忘れることはありません。今夏永平寺へ参詣されるご予定とのこと是非お立ち寄り下さい。ご案内もしますし、ご一緒にお食事でもと考えております。御早目に日程などお知らせ下さい。

（H25．5．12森下流子）

「丸の内吟行句会報」の訂正版ありがたく頂きました。本当にご苦労様です。心から感謝しております。武部さんの絵の見学そして本日は伊奈へ転居した友人の来宅と結構なんとなく日が過ぎています。俳句も月一回の義務と心得て参加させて頂いております。益々の御活躍を祈ります。（5／13小山陽也）

八日九日と法隆寺へ、鎮魂説、移設説などありますが、

学生時代日本建築史の講義は休講多く、出て来れば法隆寺の話ばかり、期末の時も法隆寺、先生気がついてこれで終りですかとあってそれから日本建築史江戸時代まで延々とされ、近代は各自でと講義終了。試験は唯一「法隆寺について知る事を記せ」でした。話の内容全く覚えなく、不肖の弟子でした。ですが元気です。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。丸の内吟行会報ありがたく頂きました。とにかく楽しい一日でした。法隆寺八～九日と見物の疲れもあってついついおくれました。五月分会費と共に送ります。相変わらず古代は別便です。

（5／15小山陽也）

一昨日いただいた豆で御飯炊きました。そら豆って剥かないで食べると本当の味が出るんだ、と実感しました。先日東京駅吟行のあと再び出直して、源氏絵と伊勢絵展で半日を過ごしました。あの近くで「アンナ・カレーニナ」を上映中だったので、それも又見直したりして（あの映画、それで五回も見ました。よくよく惚れこんだものと呆れています。）光成さんとはそのうち、立ち入って源氏物語の話をしてみたいですね。ちなみに近頃内舘牧子の「十二単衣を着た悪魔」を読みました。由ない悪敵の汚名を被せられたまま、千年も埋もれ放しだった弘徽殿太后に、はじめてあるべき人格が与えられ、丈高い女丈夫として蘇ったことに、熱いエールを送りたくなりました。

豆飯の又お替りを寿　　幸一

（5.20松村幸一）

受贈誌（五月号）

疣地蔵耳垂れ地蔵つくしんぼ（彩20句集）　平野ひろし
尺蠖の次の体勢Ω型（〃）　加藤秋子
色なき風伊根の舟屋を吹きとほる（〃）　木内芳忠
啓蟄や上野駅出づカシオペア（〃）　菊池あい子
祭り果つ桐下駄石を噛んでゐる（〃）　橘田富子天
天上界地塘に水蠆の脱ぎし殻（〃）　木内幸子
額の花重ねし歳の今が好き（〃）　木村惠子
尺蠖が振子となれり糸吐きて（〃）　木村貞恵
花道を母の丈越す卒業子（〃）　小泉博
春深むこの海幾度嘯きし（彩110号）　平野ひろし
花の山メタセコイヤの深睡り（〃）　〃
色街の笊に売らるる干鰈（あすか五月号）　山尾かづひろ

俳窓評論纂

＊親友の山本真澄から「水門」てふ詩集を貰った。彼の細君（山本和子）の上梓した処女詩集である。嘗て、二三の作品は見せてもらっていたものも、この度の詩集に取り込まれてある。あとがきを読むと、著者は中学生の

時から作詩していた。三鷹転居後、高田敏子の講座に参加、今は相模原にて金井教室に、また相模原詩人クラブに出て勉強しているとか。はらからの思い出を詩に結実させている。父、母、兄の題がそれだ。夫婦でよく海外旅行に行くとは聞いていたが、ちゃんと奥さんの詩になっているのであった。Vわたしの最後の「玉島」は左。

七島　八島　孤島
霞端の向うは
れんこん田の連島
工業地帯の水島
学生服で有名な児島
昭和橋の対岸は
源平合戦の矢出　川崎　乙島
その対岸は赤土山
い草　唐船　船尾　長尾
美しい姿の白桃は富田
（中略）
良寛さんが住んでいた円通寺
ここから見る玉島の家並みは棒瓦と白い壁
亀七のまさこちゃん
（中略）
私が育った家
岡山県倉敷市玉島阿賀崎一〇〇一番地

水門のある昭和橋の横町

中を省略してごめん。固有名詞をどんどん並べられてみると、段々心を打って来ます。名前に歴史があるからでしょう。魂があるからでしょう。和子さんは、それだけ故郷ふるさとを深く愛しているに違いない。広島市の昭和橋も名前からして懐かしかったのではないか。東京の昭和通、昭和天皇、既に平成は二十五年、昭和は遠くなりにけり、ではない。まだまだだ。著者も私も。

＊流子さんのご紹介だと思いますが、連作句文集「朱雀」（北端辰昭著）が送られてきた。著者は、通産省ＯＢの偉い方、天狼、築港で一緒だったが私とは面識はなかった。お住まいの奈良を「寧楽」と書かれて連作句と解説文を掲載され、同じスタイルで、他郷とて、琵琶湖、彦根城、瀬戸内海と四国路など比較句を並べられている。圧巻は異郷とて、インドネシアでの異文化体験を連作句と文章に纏められている。最後は今の暮しの中での連作句と文章で閉じられている。要するに、自分史としての句文集である。句集といえば、一頁二、三句を並べる形式が殆どである。それを年代順とか四季別にまとめるのしか見たことがない。この句文集は文字通り、句の背景文が連作句と並べられているので、理解し易いし、著者

に対する親しみも湧くというもの。連作句は流子さんに学んだとある。写真、スケッチ画、英語俳句あり、で著者の能力が縦横に発揮された句文集である。句集を離れて自分史に近づく危うさもあると言えなくもない。最後の「寒夕焼」の連作句を左にあげる。

閉じし瞳を開けて万朶の花仰ぐ
木瓜の花清貧通し母眠る
熱帯夜部屋締め切って母眠る
病窓の蟻逞しく餌を運ぶ
寝たきりの母に虫の音届きゐし
看取らるる母の嗚咽や秋深し
白菊に囲まる遺影笑み給ふ
通夜果てて寒星ひとつ光増す
寒菊や小さき壺に亡母戻る
寒夕焼西の浄土を疑はず

＊松下道臣句集「足形」が送られてきた。萱同人で私と並んでいつも句が載る道臣さんの第二句集である。八田木枯選の「けふ二月二十九日ぞ馬鹿をせむ」からとった馬鹿をせむ（二〇一〇～二〇一二）の中から抽出した句を書く。

つまみあぐうぐひすもちのむていかう
手の平の明るくなりし雛あられ
花筵お膝送りをしてくれし
かたつむり太陽よりも速かりし
空缶の雨があふれる秋の浜

最後の空缶の句の無常感が強くて後の句がすつと流れてしまいました。失敬。

＊季刊本物語というエッセイ集を青江由紀夫さんから頂いた。功成り名を遂げた人たちが現代社会についての思うところを自由に書かれてある。よく読めば面白い冊子といえる。本誌と同じ中綴じ24頁のホッチキス留め無の小誌であるが、中身は濃い。

青江さんの「アベノミクスとハイパーインフレの不安」は千兆円の国の借金を帳消しにするには物価が百倍になるハイパーインフレを起こす他はないというのは、私にはよくわかりません。お金のことで一喜一憂するのは感性が無くなっていくようで、別な人生を歩むが如き感が拭えない。故に、君子危うきに近寄らずとしています。

前部にある東日本大震災に因む菊池文武さんの「今回の巨大津波は想定外か」山崎正敏さんの「ふる里大槌と兄の思い出」の二文は胸を打つものがありました。歴史をよく見つめて想像力を働かせておれば、想定外なんて無いということ、正敏さんのお兄さんは、吉里吉里地方で歌い継がれてきた子守唄を子供たちに残そうと楽譜を書き起こして、ギター抱えて小学校などで弾き語りをしてきたのに、大津波にさらわれ未だに行方不明のまま。

大槌川は新巻鮭発祥の地としても有名。その兄がカムバックサーモンという詩を残していたとは、切なくも哀しい。山崎さんは、カムバックアニキーと思っている筈だ。

三好達治を読む　Ⅳ　　武者昭七

桐の花

夢よりもふとはかなげに　桐の花枝をはなれて
ゆるやかに舞ひつつ落ちぬ　二つ三つ四つ
幸あるは風に吹かれて　おん肩にさやりて落ちぬ
色も香もたふとき花の　ねたましやその桐の花
昼ふかき土の上より　おん手の上にひろはれぬ

女人への思慕と崇拝の情を、ゆるやかに舞い落ちる桐の花に託してうたいあげた恋うたである。（三好の場合、女性というよりも古風に「女人」といったほうがゆかしくふさわしいだろう。）ゆるやかに舞い落ちる紫の花はそのまま、報われぬおのれの恋情である。その人の名を問う必要はない。思い届かぬ高みにその人はいるからである。風に吹かれて舞い落ちるわが恋情のなんというはかなさ。その人の肩に触れて落ちる花のなんというねたましさ。ま昼のひかりを浴びて舞い散り、わが思うひとの手に拾われた花びら」の色と香りのかなしいまでの尊さ。典雅な調べに乗せて胸に迫る切なくも苦しい恋情が静かに詠われ、かすかなエロチシズムが行間に匂う。花筐」からもう一篇「人の世よりもやや高き」を挙げる。

人の世よりもやや高き　梢に咲ける桐の花
そは誰人のうれひとや　ありとしもなき風にさへ
散りてながるる　散りてながるる
桐の花・・・（以下略）

おのれの恋情を「人の世よりもやや高き梢に咲ける桐の花」と讃えながらその「散りてながるる」さまを詠嘆しなければならなかったところに作者の自負と同時に悲しみがあった。（２０１３．０４．０２）

芭蕉のかるみ以後（26）　　光成高志

芭蕉晩年の軽みの芸境を探って、芭蕉の二十代の俳句を見てきた。句から浮かび上がってくるのは、後のわびさびの翁のイメージと違って、古典や古歌の知識をもとに、縁語、掛詞やもじりを縦横に使う歌もうまい駄洒落のうまい軽妙な宗房（芭蕉の俳号）であった。そういう作り方が貞門風なのであるから、宗房の独創的なものはないと見るのが普通の見方であろう。

たんだすめ住めば都ぞけふの月　　いが上野宗房

「たんだふれふれ」という当時流行していた歌謡や「住

めば都」という諺を取り入れた句である。たんだ住め、住めば都ぞ、たんだ澄め、今日の月という二つの意味を「すめ」を掛詞にして融合させている。

たかうなや雫もよゝの篠の露　　宗房

これは源氏物語の横笛の巻を立ち入れた句である。薫がよちよち歩きを始めたところで、到来物の筍を食い散らすところ「御歯のおひいづるに食ひあてんとてたかうなをつと握り持ちて、雫もよよと食ひ濡らしたまへば」とある場面によった句である。「よゝ」はよだれを垂らす様だ。「雫もよゝ」はよだれを流すほどのおいしそうな風味が感ぜられる様と、筍の上に降りかかっている雫となる露を掛けている。「よゝ」は「節々」「代々」「夜々」を掛け、「よゝの篠の露」は、代々、夜毎に篠の節々に溜る露の意である。成長した筍に雫がかかっている。その雫は篠の節毎に毎夜のように置いた露が、代々に滴り落ちたものである。篠の露の恵みを受けて、筍はかようにりっぱに成長した。そのように解釈できる句である。たかうなやの切字が効いているではないか。更に、やがてこの幼児、薫の成長の暁には、源氏物語の宇治十帖が展開し、その結末まで想像を膨らませることが出来る。宗房は単に源氏物語の一節をもじったのではなく、物語の主題を頭において、一齣を裁ちいれているのだと思う。蝉吟・宗房の師事した北村季吟は後に幕府の歌学方に抜擢された俳諧師である。その師の松永貞徳は当時の最高の歌学者であった。歌学者は、「八大集」をはじめとして、「新勅撰和歌集」「伊勢物語」「狭衣物語」「源氏物語」の知識が必要であり、季吟はこれらの古典の注釈書を刊行して出世したのである。宗房の二十代は、既に習得していた謡の知識と学んだ歌学を俳諧に生かした。それが俳諧の作り方であった。更に、禅学、漢学の素養があるのは、二十三歳から二十九歳までの伝記空白期間に集中的に学んで得たのである。当時の学問は本を読む事であって、一つの本を何度も何度も読んで、つまり熟読して、考え考えてその本意を自己流に理解することであった。同時代人に伊藤仁斎、荻生徂徠がいる。彼らは基本的に独学であったが芭蕉もそうであった。

海を渡る蛇（2月号につづき）　武者昭七

もう一つ記紀神話から蛇の話を抜き出してみよう。有名なのはヤマタノオヲロチの話である。タカマガハラを追放されたスサノヲは出雲の国の肥の河の川上に降りたちそこで美しい娘を囲んで嘆き悲しむ老夫婦に出会う。わけを聞けば、自分たちには八人の娘があったけれど、コシのヤマタノヲロチという大蛇が年ごとに来ては食ってしまった。今度はクシナダヒメという最後の娘の番にあたるがゆえに哭くのだと。少しく注釈を加えるなら、

オロチとは巨大化した蛇であり、ヲは山の「峰」、ロは助詞「の」、チはイカヅチ、イノチなどのチに同じく自然物の激しい力をいうという。八つの峰や谷を覆い尽くすほどの巨大な蛇というわけであろう。スサノヲは娘を櫛に変身させ自らの髪に刺す（一種の呪術で櫛には女性が具えている特有のパワーが宿るとされたらしい。）と、強力な酒をヲロチに振る舞い、酔ったと見るや、剣をかざしてずたずたに切り裂いた。尾から取り出した剣はアマテラスに捧げられやがて帝位の象徴クサナギノツルギとなる。

それにしてもクシナダヒメとは何者なのか。クシは「櫛」であると同時に「奇シ」であり、自然の霊妙不可思議な力、霊力。イナダは稲田、水田のことで彼女は稲作儀礼にかかわる女性ということになる。蛇は稲作に欠かせない水の精霊だからクシナダヒメは水源に水神をむかえて供応する巫女を意味する。（僕の住まいの近くの寺院にも、藁で作った大きな蛇を樹に絡ませる祭りがある。）この話を未開社会にあった人身御供（いけにえ）の習俗とか、暴れ川の肥の河の治水談とか、異種族との闘争談の名残りとする読み方は近頃は影が薄いようだ。（岩波思想体系「古事記」補注）

クシナダヒメはスサノヲと結ばれてその正妻ヤエガキヒメとなる。その新婚の喜びうたがこのあとに続く。「八雲立つ　出雲八重垣　妻ごめに　八重垣作る　その八重垣を」。幾重にも垣をめぐらした宮殿を建て、そこに愛しいわが妻を据えるこの喜びよ、というのである。（「オロチ居る上に常に雲気あり」と紀の割注にあるのは「八雲立つ出雲」とオロチとの関係を暗示していないだろうか。）ところでクサナギノツルギは源平合戦の折、壇ノ浦に沈んで二度と人間の手には戻らなかった。海底の竜神が取り戻したのだと平家物語は語る（巻十一　剣）。年月経てもヲロチは健在であった。（終）

我孫子日記

４／２４ＳＯＡ。４／３０*東京駅吟行句会。４／１ＳＯＡ。５／３小岩。５／８ＳＯＡ。５／１０*2水元公園。５／１６京橋、日比谷。４／１７例会。

＊地下道のポスターもみな夏に入る　幸一
両翼のドームどつかり大南風　孝三
迎賓口高野槙と五葉松　陽也
春陰やドーム天井影ほのか　敬司
この先に大手門あり青嵐　みち
芍薬の玉や三菱一号館　高志
マロニエの花やビル風すこし和ぎ　興正
化石人のごとく若葉の丸の内　一艸人
新社員闊歩千代田区丸の内　宏之助

*2解き縄ありしばられ地蔵も薄暑かな　みち

睡蓮や水に言葉のあるごとく　敬司

若葉して川もみどりに流れけり　順子

初夏の花満載にサッパ舟　土火

かけはぎの白き看板風薫る　たけ子

園丁の通りたるあと草いきれ　良子

熟睡人（うまいびと）メタセコイヤの緑陰に　高志

編集後記

十七日に例会があって、今日が二十日。明日、孝三さん昭七さんとの浅草懇話会があるので、大急ぎで編集した。十六頁の中綴じ俳誌に原稿が足りないかと危ぶんでいたところ、陽一さんの鑑賞文、ストックしてあった昭七さんの蛇の原稿、それに幸一さんのハガキが飛び込み、なんとか十六頁に納まった。今月入った新たな句集・詩集などが4冊。目を通し、要約するのはなかなか骨が折れる。そこで全部でなく読めるところ、好きなところをよく読み、残りは後にするということを思いついた。今月のものは、全部読みましたが、以後そういうことにしたいと思います。陽一さんの「ファーブルの机」は句評を書き出して、途中でやめて何年も経つ始末。幸一さんと源氏物語につき、話す機会がどうやら実現しそうだ。私はとても、太刀打ちできそうもないので、市内在住のIさんというその方面の先生にお出まし願って、源氏物語会を三人で持ちたいと勝手に思っています。Iさんにはそのうち了解してもらいます。来週から、中学生に俳句を教える授業が秋まで八回ある。近いうち流子さんに会いに福井行きを計画したい。又、興正さんの吉見百穴は日帰りで行きたい。気候の良い春秋はどうしても出歩きたくなります。一方、畑の作物はどんどん実を付けるので、収穫、秋口は種取りなど菜園の作業は切りがないほどある。編集の合間を縫ってやっている。今夏は、猛暑にならないように、お天道様許して下さいな。

補追：右で編集を終り、印刷・製本に入った夕方、孝三さんのFAX，青江由紀夫さんからメール便が届いた。一歩遅かったので、来月号にまわします。鑑賞文他原稿はいつでも受けますので、気づきの時に送り下さい。

白金葭五月号（第27号）
発行所　我孫子市南新木2-14-17
編集・発行人　光成高志
（電話・FAX　〇四―七一八七―一〇六八）